

東京都江戸東京博物館シンポジウム「江戸城研究の新視点」

第1部「織豊城郭としての江戸城」開催趣旨

2008年3月、江戸東京博物館は開館15周年を迎える。開館以前の展示プランでは、常設展の導入部展示は、慶長年間（1596～1615）の展示を計画していたようである。しかしその後の準備作業を経て結実した「江戸城と町割り」コーナーにおいて、展示の中心となった年代は、慶長期ではなく寛永年間（1624～44）であった。資料の残存状況および当時の研究状況を考えた場合、当然の判断であったと思う。しかしその結果、徳川家康が征夷大將軍に任じられた当時の江戸城はいかなる構造であったか、という問題は重要な研究課題として残されることになった。さらに言えば、家康が江戸城に入城した天正18年（1590）頃の状況も不明のままとなった。こうして近世初頭の江戸城の姿を追求するという課題は、江戸東京博物館にとって開館以来残された重要な研究テーマになっていた。

一方で江戸東京博物館開館から現在にいたる迄の15年間に、近世初頭の江戸城をめぐる研究は著しく進んだ。

ひとつには江戸城内の発掘調査が進展したことがある。直接的に中世から近世初頭にまで及ぶ調査成果は得られていないが、当時の状況を考えさせるデータが徐々にではあるが蓄積されてきた。このことは江戸城研究を進める上で重要な情報源となっている。

次に西日本を中心に織豊城郭の研究が大きく進展したことがある。織豊城郭とは織田信長・豊臣秀吉さらには徳川家康の時代に、彼らの周辺で築かれた城館を指し示す概念である。概念設定においては徳川家康の存在も視野にあったが、具体的な研究は主として織田・豊臣政権によって築城された城館が対象とされ、織豊時代を中心に考古学的に研究が進められた。その視点は中井均によって提起された高石垣・礎石建物・瓦の三点セットであった（中井「織豊系城郭の画期—礎石建物・瓦・石垣の出現—」1990〔『中世城郭研究論集』新人物往来社刊〕ほか）。これらが織豊城郭の段階で出現すると考えられるようになったことは、草創期の江戸城と同時代の城館を考える視角が十分に定まったことを意味する。織豊城郭研究の進展は、江戸城を取り扱う直前に至っていた。

三点目に豊臣大名徳川家の城館を考える材料が提示され始めていることである。近世初頭の江戸城は寛永以後の増改築により大きく改変され、本丸付近は地中深くに埋められたと考えられている。江戸時代の遺構を破壊して掘り進めれば、当時の様相は明らかにできるが、それは江戸時代の遺構の除去を前提とすることになり、現代の技術水準では不可能なことである。江戸城に限らず、近世初頭に徳川家が関係した城館には増改築が加えられ、当時の様相は著しく失われている。そのなかで、箕輪城（群馬県高崎市）の保存整備事業による発掘調査は重要な視点を提供した。箕輪城は1590年代に井伊直政が拠点とした城館で、慶長3年（1598）の高崎城移転にともなって廃城となった城館である。当時の井伊直政は徳川家臣団の中では最高の石高を有していた。年代や井伊直政の地位から、箕輪城は関東入国後の徳川家の城館を考える

のに相応しい素材であった。加えて、小田原城（神奈川県小田原市）・騎西城（埼玉県騎西町）・鉢形城（埼玉県寄居町）・唐沢山城（栃木県佐野市）・佐野城（同）などでは部分的ながら当該期の遺構を検出していた。同時代状況は関東の中でも確実に蓄積されていた。

最後に前代の戦国時代からの視点も見逃さない。齋藤慎一「江戸の中世から近世」（東京大学出版会『UP』411号、2007）は、中世から近世初頭に至る江戸城の空間構成を論じた。江戸城と城下町は、南北方向の東海道を基軸とする城下町ではなく、東西方向の鎌倉街道にそって形成されたものであり、西を正面として、東に拡大したと後の時代との相違を述べた。

この15年間に蓄積された研究成果は、江戸城研究に新視点をもたらすものであった。その視点とは近世初頭の江戸城は織豊城郭論の中でどのように位置づけられるのか、もしくは位置づけられないのかという議論である。本シンポジウムはそのような背景の中で開催された。

シンポジウムの企画にあたって、いくつかの論点が出された。

ひとつには発掘調査から近世初頭の様相を再確認する必要があることである。一地点の江戸時代史を語るに過ぎない発掘調査から、江戸時代初頭の様相のみを紡ぎあげるのは容易なことではない。発掘調査者からの問題提起がまず望まれていたと言ってよいであろう。

次に織豊城郭の条件に照らして、江戸城はどのように理解できるか。その中心的な視点として瓦と石垣が論点としてあがった。

まず瓦であるが、近世初頭の江戸城の瓦についての研究蓄積は十分でない。その状況下であるが、金箔瓦を使用しない（研究史的には“できない”）徳川家とそれを包囲する豊臣系の金箔瓦の城館という対比があった。しかし、近年ではやや年代は下るものの江戸城域でも金箔瓦は出土するようになった。この研究状況をどのように理解し、江戸城の装飾でありかつ権威の装置である瓦をどのような視点で考えるか。この論点を追求する必要が生まれた。

そして石垣である。織豊城郭のメルクマールのひとつに高石垣の存在がある。確かに江戸城には高石垣がある。しかし関東地方では高石垣をもつ城館は極めて少ない。この点に大きな論点を提示したのは先の箕輪城の調査であろう。豊臣期徳川領の箕輪城には高石垣は存在していないのである。そのような現時点の状況も踏まえ、江戸城の高石垣をどのように考えるかという議論は極めて重要な論点と言えよう。

シンポジウム開催の趣旨は以上である。前掲論点の検討を通して、近世初頭の江戸城をどのように描くかが課題となった。しかしその課題を本シンポジウムのみで解決することは無理である。今後の方向性を得ることができれば成功である。これが本シンポジウムの目標となった。

最後に本シンポジウムの成果について若干触れておきたい。その成果は目標を大きく上回るものであった。詳細は個々の報告にゆずるが、東国と西国との対比の視角を織豊城郭論にも導入すべきという方向性を確認することができた点は大きな成果であった。西国の高石垣に対して東国の鉢巻き石垣、そしてその折衷としての江戸城という指摘である。研究史の積み上げの中から見えた近世初頭の江戸城の歴史像は、既存のイメージを大きく変えるものであったといっても過言ではあるまい。

（文責・齋藤慎一）